

2021年12月17日

東京海上ホールディングス株式会社
取締役社長 グループ GEO 小宮暁 殿
東京海上日動火災保険株式会社
取締役社長 広瀬伸一 殿
東京海上日動あんしん生命保険株式会社
取締役社長 中里克己 殿

東京海上ビルを愛し、その存続を願う会
会長 奥村珪一

東京海上ビル本館（1974年）の存続に関する公開質問状

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、建築家・前川國男（1905～86年）の下で、1974年に竣工した御社の東京海上ビルディング本館の設計監理の実務に携わった前川國男建築設計事務所の元所員を中心に結成された有志の会です。会の名称にもありますように、御社が、本年3月25日に突然に発表された「本店移転のお知らせ」の中で示された「新館との一体での建替えを予定」との方針を聞き及び、急遽、居た堪れない思いから会合を持ち、この会を立ち上げました。また、御社が、続いて本年9月30日に発表された「新・本店ビル計画のコンセプトについて」の中に記された本館の「歴史的価値を明らかにし後世に伝えるために、有識者の協力を得ながら、記録調査と継承方法の検討を行います」との記述と、「2022年10月の解体着工」という「今後のスケジュール」を知るに到り、こうした活動を思い立ちました。残された時間はわずかではありますが、ここに改めて、前川國男の仕事の歴史的な意味とこの建物の歴史的及び建築的、都市計画的、景観的価値を深く認識する立場、および脱炭素に向けて地球環境を守るSDGs的立場から、下記のような項目について、御社の考えを、より詳しくおたずねしたいと思い、こうして公開質問状の形式を取った次第です。誠意のあるご回答を切望します。

1. 前川國男は、本館の設計中の1968年に、「近代建築の発展への貢献」を受賞理由に、この年に新たに創設された第1回日本建築学会大賞の受賞者に、「大賞部会全員一致」で選ばれます。その推薦の言葉には、次のように記されていました。

「前川君の幾多の作品は、数を重ねるごとに新たな問題の解決と手法の開発とによって、造形芸術として建築の質的向上を示しており、わが国の近代建築がきびしい諸条件のなかにあって戦時中の空白を埋め、さらに前進をはかり、近代建築の大道を築かれたあとをふり返るとき着実な作風によって確固たる指標を示した前川君の業績は高く評価されるべきである。」（「推せん理由」『建築雑誌』1968年10月号）

こう評価されたように、前川には、この時、すでに史上最多となる6度に及ぶ日本建築学会作品賞受賞という輝かしい業績がありました。そうした建築の実践を通して、前川が何よりも求めようとしたのは、時間に耐えて長く愛されてゆく近代建築をどうしたら実現できるのか、着実に確かな素材の選定と構法の開発でありました。本館は、そうした永年にわたる技術的な蓄積によって初めて実現した極めて質の高い超高層ビルであり、そこには、前川の希求した風雪と時間の流れに耐えて成熟する風格が備わっています。だからこそ、竣工時には、「日本の超高層建築の原点であり、新しい都市空間への先駆者であった」として、第17回建設業協会賞（BCS賞）を受賞します。その「選評」には、御社が竣工時に作成されたパンフレットから、次のような言葉も引用されていました。

「その企画と設計は、丸の内1丁目から大手町にかけての超高層化と、それによる緑と太陽の地上空間獲得のための先駆となったもの。（中略）このビルは、オフィス街の都市空間における人間性獲得の新しい渦の発生地という名誉を後世に受けるかも知れない。」（東京海上火災保険株式会社『海上ビルと丸の内の変遷 東京海上ビル本館完成記念』1974年）

こうした高い評価は、もちろん前川一人が実現させたものではありませんでした。「美観論争」による工事の遅れや建設規模の縮小など、度重なる紆余曲折と試練の中で、御社が、前川的设计趣旨を最後まで尊重されて、先駆となる丸の内最初の超高層ビルの完成を遂行されたからこそ、現在の姿があるのだと思います。だからこそ、同じパンフレットの中で、前川は、次のような感謝の言葉を寄せていました。

「途中、種々の難関に遭遇いたしました。その間、終始かわらぬ暖かいご理解と、心のこもったご支持ご鞭撻をいただきました。歴代社長の、高木社長、山本社長、菊池社長をはじめ、施主側の皆さまに心からお礼を申し上げます。（中略）ものいわぬ建築は、これを使われることによって、はじめてホントに生きた建築になるものと思います。東京海上の新社屋の健全な成長を祈ってやまぬ次第でございます。」

前川が、文末に、「健全な成長を祈って」と記したとおり、本館の建物は、御社の地道なメンテナンスのご努力によって、今日まで、極めて健全な形で美しく維持されて来ました。同時に、そうした先人たちの思いが込められて完成した記念碑的な本社ビルだからこそ、現在もなお、学生たちの就職希望先のトップランクを占める御社の企業イメージの象徴となり得たのだと思います。同時に、皇居のお濠端の角地という首都東京の日本の都市景観を代表する一等地に相応しい風格を持つ建物であるからこそ、その存在は、すでに歴史的、文化史的な意味を有する社会的な存在にもなっています。

そうした輝かしい歴史を持ち、それもわずか築50年にも満たない建物を、なぜ全面的に取り壊す必要があるのでしょうか、私たちは理解に苦しみます。

むしろ、同じくお堀端に並んで建つ戦前期を代表する明治生命館（1934年）や第一生命館（1938年）のように、戦後を代表する近代建築として、今後も大切に維持管理されていくことが求められているのではないのでしょうか。私たちは、本館は、世界へ誇れる超高層ビルの名作だと思います。本館が近い将来、国の重要文化財に選定される資格を有している、と私たちは信じております。なぜこれらすべての価値を無にする全面建替えという方針を、敢えて採択されたのでしょうか。その具体的な理由を改めてお聞かせ下さい。

2. 「新・本店ビル計画のコンセプトについて」の中に、御社が、「気候変動対策の推進」を通じて、「SDGsの達成」に「貢献してまいります」と記されていますが、築50年足らずの本館と1986年に建てられた新館を含む、延床面積が約11万5千3百㎡のすべてを、

その耐用年数を残したまま、跡形もなく取り壊すこと自体が、そうした方針と全く相容れないのではないのでしょうか。昨年来、世界中を襲っている新型コロナウイルスの感染拡大や、近年の異常気象による自然災害の急増などに、顕著な形で現れているように、地球環境の健全な維持と持続可能な社会を次世代へと受け継いで守っていくためにも、全面建替えという方針は、病んでいる地球に対してハイインパクトな影響を与えることとなります。2050年脱炭素に向け、地球にダメージを与えないローインパクトな改修での選択はないのでしょうか。御社の掲げる「気候変動対策の推進」、「SDGsの達成」との整合性をどのように考えておられるのか、お聞かせ下さい。

3. 「新・本店ビル計画のコンセプトについて」の中に記されている本館の「歴史的価値」とは、何だと思われているのでしょうか。また、建物全体を取り壊す計画で、それを「後世に伝える」ことが、本当にできるとお考えなののでしょうか。「継承方法の検討」について、具体的にお教え下さい。

4. 「新・本店ビル計画のコンセプトについて」の中に記されている本館の「最高レベルの災害対応力」として免震構造の採用、浸水対策、非常用発電機の設置などは、保存リノベーションを検討されたのでしょうか。同様の高層ビルの保存再生では、2019年に免震構造でリノベーションされた香川県庁舎は今年度重要文化財に指定されました。この耐震対策は、東京大学名誉教授の岡田恒男氏を会長とする「香川県庁舎東館保存・耐震化検討会議」を設置。各分野の有識者が審議し、「高い文化的な価値を持つ建物であり、将来に向けて保存すべきである」とする報告書をまとめ検討が行われて、LCC,LCCO2共にリノベーションでも効果が高いとの結論から既存再生を行っています。SDGSと災害対策を兼ね備えたリノベーションとして、このような保存再生の可能性は追求されたのでしょうか。

5. 東京海上ビル本館の広場には流政之の波カグラともう1体の彫刻があります。この彫刻はこの広場の為に制作され、広場及びエントランスホールそのものが流政之のデザインと深い関係で成り立っており不可分のものです。建築については日本においては著作権が極めて限定的でありそのことの問題をどう取り上げるかが一つの課題ですが、彫刻については明確に著作権が存在する筈です。その事についてはどの様に考え、対処してゆかれるのでしょうか。

以上の問いに対するご回答をお願い申し上げます。尚、ご回答いただいた内容については、広く公開させていただく予定です。何卒、よろしくお願い申し上げます。

敬具